

## シャンペン・コミュニスト

——エンゲルスの二面性<sup>1)</sup>——

アスキュー・デイヴィッド

哲学者は世界を解釈してきたに過ぎないが、重要なのは世界を変えることだ。カール・マルクス (Karl Marx, 1818-1883) がかつてこのように述べたのは、あまりにも有名である。マルクスとフリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-1895) は、彼らの打ち出した共産主義思想によって実際に世界を変えたのであり、まさにそのために、彼ら（およびその思想）に対する評価は毀誉褒貶の両極に分かれてきた。しかしエンゲルスの評伝、『マルクスの将軍——フリードリッヒ・エンゲルスの革命的生涯』(Marx's General: The Revolutionary Life of Friedrich Engels) はいずれの極にも与しない、バランスのとれた著作である。著者のトリストラム・ハント (Tristram Hunt) は一九七四年生まれの若手で、確かにイギリス労働党との深い繋がりがあるものの、あくまでも冷静かつ公平にエンゲルスを語ろうとしている。こうした冷静さはこれまで共産主義や共産主義思想に対する党派的感情に左右されてきた論客と大きく異なる点であり、ハントは理想的な伝記作家だといえるだろう。ベルリンの壁の崩壊から二〇余年、そろそろエンゲルスとその思想を冷静にまた客観的にみつめ直すときがきたのではないか。『マルクスの将軍』はまさにこの絶妙なタイミングで登場した待望の著作に他ならない。

さて、エンゲルスといえれば思い浮かぶのが、革命家としての顔であり、数々の著作——『イギリスにおける労働者階級の状態』(Die Lage der arbeitenden Klasse in England, 1845)、あるいは『反デューリング論』(Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft, 1878) からの抜粋である『空想より科学へ』(Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft)、「社会主義フェミニズムの基礎テキスト」たる『家族、私有財産および国家の起源』(Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats, 1884)、そして何といてもマルクスとの共著で多大な影響をもたらした、文字通り世界をゆるがすものとなった『共産党宣言』(Das kommunistische Manifest, 1848) ——の著者としての顔である<sup>4)</sup>。

『イギリスにおける労働者階級の状態』——これはエンゲルスが弱冠二四歳のときの処女作である——や『共産党宣言』といった初期の著作から晩年の『反デューリング論』の間には、著作活動のない三〇年もの空白があるが、この間エンゲルスは何をしていたのであろうか。ここでハントが浮き彫りにするのは、第二の知られざるエンゲルスの顔である。それは、裕福な資本家としての顔であり、自らの知的な野望を棚上げにし、娯楽と贅沢三昧に耽りつつ、なおかつマルクスのスポンサーとして活躍する顔である。ハント曰く、このエンゲルスは「放蕩主義的で、社交に耽り、大酒飲みで、贅沢な生活、つまりロブスター・サラダやシャトー・マルゴー、ピルセナー・ビール、そして高級売春婦などハイライフには目がなかった」という<sup>5)</sup>。

エンゲルスは共産主義の総本山でありながら資本家でもあり、フェミニストでありながら女性にだらしがなく（ハントによれば「パリの下層の娼婦たちと遊びまくった」という）、一八四八年から翌四九年の革命では武器を手にとって闘ったことがありながら、後に中産階級の重臣という顔をもつ者であり、マルクスの体裁を保つためにマルクスが女中に産ませた子供を自分の子として認めながら、ブルジョワの道德規範を激しく批判した<sup>6)</sup>。ハントの伝記にはこうしたエンゲルスの二面性、つまり共産主義者・革命家である一方、同時に裕福な資本家であり、狐狩りなど貴族的趣味をもつブルジョワ的エンゲルスがうまく描かれている。

エンゲルスは理論と実践との両立を唱え、実際に行動した人物であり、彼の生涯は波乱に満ちている。ハントもいうように、「エンゲルスはマンチェスターではチャーティストの運動家に肩入れし、一八四八年から翌四九年の革命にはドイツのバリケードの配陣について、一八七一年には「遠くからではあるが」パリのコムニオンを扇動し、一八九〇年代のロンドンでは、イギリスの労働者運動のバツとしない誕生を目撃した<sup>7)</sup>」。これだけの豊富な材料があれば、伝記はつまらなくなりようがないかも知れないが、ハントはこれを見事に生かし、魅力的な伝記に仕上げている。

ハントはまずマルクスに関する最近の伝記作品を鳥瞰し、マルクスが「愛すべきごろつき」、<sup>8)</sup>「愛情深い父親」、そして「人間の丸い、愛嬌のある、驚くほど現代的な個人」として描かれていることを指摘する。今や社会主義者の間では、レーニン主義やスターリン主義の最も醜悪な側面、つまり、マルクス主義の代名詞となってしまった全体主義的・暴力的政治に責任があるのは、マルクスかエンゲルスか、ということが特に争点になっている。大方の見方はレーニン主義もスターリン主義も「科学的」エンゲルスの影響で、「ヒューマニスト」のマルクスには責任がないというものだが、ハントはこの説に異を唱える。

ハントの描くエンゲルスは愛すべき不良としてのエンゲルスであり、ハント自身もこれにすっかり魅了されているといっている。というのも彼は、エンゲルスを「最初のシャンペン・コミュニスト」、「贅沢なハイライフに耽溺するボヘミア主義者」と呼び、冷たい科学的なイメージとは裏腹に、エンゲルスが人間的であったことを訴えようとしているからである。（尤もこうした快楽主義的放蕩三昧の生活は、人によっては批判の対象ともなりうるが、ハントは明らかにエンゲルスの人間らしさを示すものとして好意的にみている。）

周知のとおり、エンゲルスは一八二〇年末にプロシアの工業の中心地、ラインランドはバルマンに金持ちの宗教心厚い家庭の長男として生まれた。父親はイギリスのマンチェスターにも工場をもつ織物工業の資本家であり、エンゲルスはブルジョワの息子として生を受けたことになる。

地元のギムナジウムで教育を受けた後、エンゲルスは家業を継ぐべく修行をさせられる。この頃の彼はフェンシングや水泳をはじめ、詩を出版し、そして読書に励むという精力的な側面をみせている。一八三九年出版の「ヴッパータルからの手紙」(Briefe aus dem Wuppertal)には、彼の強力なポレミカルな論客としての側面がすでに色濃く表れている。学生結社連合(Burschenschaft)の会議に参加し、青年ドイツ運動のナショナリズムや青年ヘーゲル派(Junghegelianer)の哲学に感化された。

一八四一年、エンゲルスはベルリンに向けて出発する。ベルリン行きの理由をプロシア国への兵役義務を果たすためとしていた彼だが、ベルリンに着いた途端、もっと陽気なベルリンのカフ

エや大学文化の雰囲気には惹かれてしまった。ベルリン大学では、シリング（Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854）の講義を受けたが、同じ教室にはブルクハルト（Jacob Burckhardt, 1818-1897）、バクーニン（Michael Bakunin, 1814-1876）、キェルケゴール（Søren Kierkegaard, 1813-1855）といった錚々たるメンバーが肩を並べていた。エンゲルスは「ビール飲みの知識人」（Beer literati）として知られる、ボヘミア的な青年ヘーゲル派の会に参加し、彼らの「放蕩的なビールがぶ飲み会」に参加した<sup>10)</sup>。そして青年ヘーゲル派の観念主義からは離れ、物質主義に与するようになった。

エンゲルスが次に目指したのは、父親が経営権を半分もち経営が順調な織物工場エルマン&エンゲルス（Ermen & Engels）のある、イギリスはマンチェスターであった。旅の途中で、エンゲルスはマルクスと初対面しているが、このときはこれといって意気投合はしなかったようだ。

マンチェスターにおける織物工場は、エンゲルスが資本主義のメカニズムを観察する上で有効な「見地」<sup>ケース・スタディ</sup>を提供した。（マルクス主義とは、詰まるところ、マンチェスターの資本主義の経済的現実、ドイツ哲学とフランス政治の理論の洞察を結合させたものである。）エンゲルスは当時の主要なチャーティスト運動家と交わり、一八四三年初頭には、後に愛人となる、アイルランド人の女工——元女工で、当時女中として働いていたという説もある——メアリー・バーンズ（Mary Burns, 1823(?) - 1863）と出会う。

一八四四年にマンチェスターから故郷のプロシアに向かう途中、エンゲルスはパリにいるマルクスをもう一度訪ねる。再会した二人は、今度は意気投合したらしい。「一〇日間のビール漬けの末、二人は生涯貫くこととなる、感情的、イデオロギー的絆を結んだ<sup>11)</sup>」。マルクスに天賦の才能をみたエンゲルスは、自らはマルクスを補佐する「第二バイオリン」の役に甘んずることで満足した<sup>12)</sup>。

このあたりはエンゲルスの個人史からみて、大変面白い時代である。エンゲルスは若く奔放で、ヨーロッパ大陸のあちこちに足を運び、社会の劇的な変化——それは（一瞬ではあるが）一八四八年から四九年の革命で実現しそうにみえた変化——を唱えていた。これらの革命はバリケード上で実際に血を流す機会をエンゲルスに与えたが、失敗に終わった。今やマルクスやエンゲルスを受け入れようとする国は殆どないというありさまであった。一八四九年の末、彼らは再びロンドンで再会した。資本主義経済の中心地として、共産主義者の批判の槍玉に挙げられていた世界都市ロンドンが、この二人の革命家に安全な避難場所を与えたという事実は、何とも皮肉な話であろう。

一八五〇年から一八七〇年までの約二〇年間、エンゲルスはマンチェスターにあるエルマン&エンゲルス社で働いた。ハントによれば、エンゲルスは、マルクスとその一家に経済支援を提供し、マルクスに『資本論』（*Das Kapital*）を執筆させようと、自らの政治活動や知的活動、執筆活動を放棄したという。（ハントはエンゲルスが何故知的活動を貫こうとしなかったのか、何故知的活動の代わりに贅沢三昧に耽ったのかについては言及していない。）周知のとおり、『資本論』の第一巻は一八六七年に出版されており、マルクスの死後、エンゲルスはマルクスの遺稿を編集し、『資本論』の第二巻、第三巻として出版している。

エンゲルスはマンチェスターで再びメアリー・バーンズと愛人関係になっている。しかし、女中との愛人関係は世間体が悪いので、エンゲルスは二つの家を住み分けることとなった。一つは

公的な堅気の中流階級の家であり、もう一つは私的なボヘミア的生活者の家である。彼のこの二つの家は、資本家（ブルジョワ）であり、共産主義の革命家（反ブルジョワ）でもあるエンゲルスの内面の矛盾を映し出している。メアリーは一八六三年に亡くなったが、翌六四年までにはメアリーの妹が女中から愛人に「昇格」した。<sup>13)</sup>

エルマン&エンゲルス社の労働者のお陰で、エンゲルスは大変な金持ちになった。ハントはエンゲルスが綿織産業の王子として君臨した二〇年以上もの間、彼の年収（今日の貨幣価値に換算して年収は四十五万ドルから六〇万ドル——約四千五百万から六千万円）の半分はマルクスとその一家に仕送りされたという。マルクスは特に自分の嫡出子にブルジョワ的な堅気の生活をさせることに余念がなかった。マルクスには、住み込み女中との間にできた非嫡出子の息子、フレディ（Freddy — Frederic Demuth, 1851-1929）もいたが、生涯実の子として認めることはなかった。エンゲルスは代わって父親を名乗った。（後にフレディが母親——マルクスの死後、エンゲルスが女中として雇った——に会いに行くときには、家の勝手口を使うことを強いられた。）

一八六九年、エンゲルスはエルマン&エンゲルス社の持ち分を二百四〇万ドル（約二億四千万円）で売り払った。彼は最早、綿織産業の王子ではなく、四九歳にして典型的な不労所得生活者、いわば有閑貴族となっていた。翌年ロンドンに移り住んだエンゲルスは再び執筆活動をはじめ、「マルクスの権威を搾り出し、イデオロギーとしてブレのないものを目指した」<sup>14)</sup>という。

ハントの描くエンゲルスは概ね好意的なものだが、その一方で魅力に乏しい側面も浮き彫りにされている。その一つに、エンゲルスの党の主導者としての不寛容な態度が挙げられる。ハントは共産主義における「大異端審問官」としての役を演じたエンゲルスは、異端者を追い詰めるのに多大な喜びを見出したという<sup>15)</sup>。そしてこれは社会主義の歴史における一つの章、つまり「その後一五〇年間の（……）左翼陣営の政党内で行われた破門、弾劾、<sup>バージ</sup>追放」という負の歴史を「不気味に予兆するもの」であったという<sup>16)</sup>。もう一つは、人種差別主義、女嫌いの側面である（エンゲルスは特に教育を受けた女性を嫌った。女性へのだらしなさは、女嫌いの男性によくみられる習性である）。

ハントの文体は軽やかで、流れがある。ややドライなユーモアセンスがあり、これがエンゲルスを描く上で絶妙に発揮されている。例えば一八四八年の革命の後、エンゲルスはドイツにおける反乱を支援していた。しかし、その反乱軍の指導者の無能を批判せずにはいられなかった。「ある時点で、エンゲルスが反乱軍の指導者の弱点を分析するのにあまりに細かく、プロシア帝国軍による殺戮が行われることをあまりにも生々しく説いていたが故に、反乱軍の士気をこれだけ下げたからにはエンゲルスは革命の敵に相違ない、という理由で反乱軍が彼をスパイとして捕えたほどである」<sup>17)</sup>。また、ハントは皮肉たっぷりにマルクスを短気で自己中心的な人物として描いている。例えば、エンゲルスの長年の愛人、メアリー・バーンズが死んだとき、マルクスはエンゲルスに手紙を書き送っているが、その内容は、お金がなくて自分の生活がいかに貧しく惨めか、子供の高い教育費を支払うのがどんなに大変かということについて、不平不満をぶちまけたものだった。悔やみの言葉といえ、<sup>18)</sup>「一つの災難はもう一つの災難から気をそらしてくれる」というものであった。

エンゲルスとマルクスは確かに世界を変えた。しかし残念ながら、良い方向には変えられなかった。彼らの思想が、その理想とは程遠い彼ら自身のブルジョワ生活に支えられていたという偽

善と矛盾にもかかわらず、世界を席捲したという事実には全く愕然とするより他ない。しかしこうした理不尽は、伝記として読む限りは非常に面白いものである。ハントのエンゲルス評伝は、共産主義が事実上の終焉を迎えた今だからこそ、楽しめる読み物であるといえよう。

## 注

- 1) 本稿は、二〇一〇年四月にオーストラリアの文芸誌、*Quadrant* 誌に出版された“Champagne Communist”を基に、加筆・訂正したものである。David Askew, “Champagne Communist”, *Quadrant*, April 2010, pp.123-125を参照されたい。
- 2) Tristram Hunt, *Marx's General: The Revolutionary Life of Friedrich Engels*, New York: Metropolitan Books, 2009. 英国では、Tristram Hunt, *The Frock-Coated Communist: The Revolutionary Life of Friedrich Engels*, London: Allen Lane, 2009（後のペーパーバック版が *The Frock-Coated Communist: The Life and Times of the Original Champagne Socialist*, London: Penguin, 2010）として出版された。
- 3) 『マルクスの将軍——フリードリッヒ・エンゲルスの革命的生涯』が出版された二〇〇九年の翌二〇一〇年の英国の総選挙——下院議員を選出するための庶民院総選挙——に、ハントは労働党の立候補として出馬し当選した（<http://www.parliament.uk/biographies/tristram-hunt/85049>）。
- 4) 引用は Hunt, *Marx's General*, p.304 による。
- 5) Hunt, *Marx's General*, p.3.
- 6) 引用は Hunt, *Marx's General*, p.310 による。
- 7) Hunt, *Marx's General*, p.7.
- 8) Hunt, *Marx's General*, p.5.
- 9) Hunt, *Marx's General*, pp.207, 259.
- 10) Hunt, *Marx's General*, pp.55, 56.
- 11) Hunt, *Marx's General*, p.115.
- 12) Hunt, *Marx's General*, pp.6, 117, 179, 336.
- 13) Hunt, *Marx's General*, p.227. ハントは「昇格」(upgraded) という言葉を使っている。
- 14) Hunt, *Marx's General*, p.239.
- 15) Hunt, *Marx's General*, p.134.
- 16) Hunt, *Marx's General*, p.133.
- 17) Hunt, *Marx's General*, p.173.
- 18) Hunt, *Marx's General*, p.226.